

閥鍋系詰め込み

3MX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リハビリ込みで好き勝手に書いていくようなものです
過去作は1度削除させていただきますが、ご了承ください。
1つにつき3話くらいは作ろうというそれなのである

第1シナリオ

F a t e / v a n p a i a k i l l e r | B l o o d y f u l l M o o n

目次

o n 宵月	15
r B l o o d y f u l l M o	
F a t e / v a n p a i a k i l l e	
o n 前夜	8
r B l o o d y f u l l M o	
F a t e / v a n p a i a k i l l e	
o n	1
r B l o o d y f u l l M o	
F a t e / v a n p a i a k i l l e	

F a t e / v a n p a i a k i l l e r
— B l o
o d y f u l l M o o n —

時は2004年

年が明けてもまだまだ寒さの厳しい2月

日本の某所H市にて始まる血で血を洗うような戦いが行われると聞きつけ、1人の青年がやってきた。

身長は180センチ程、髪は茶、ロングコートにブーツ、青のインターとジーンズを着こなしている。

後ろ姿を見るとまるで英国系の見た目だが、半分英国人なので間違いはない。

「ここが冬木：。とてもいい流脈を感じる。厄災なんて嘘みたいだ。」

簡単なフィールドワークを済ませ、待ち合わせの時間を赤い大きな橋の近くで待つ。

(聖杯戦争：。60年周期で行われる争い。七人のマスターがそれぞれサーヴァントと呼ばれる英霊を使役し万能の願望器とされる『聖杯』を奪い殺し合う。なるほどな。この異常なまでの龍脈の活性はそれが理由か)

彼の名はユーリ・ベルモンド

夜を狩る一族。異形退治の専門家。ベルモンド家の血を受け継ぐヴァンパイアハンターである。

「彼がこの地に来た理由は先の説明であった聖杯戦争。既に説明されているように本来の聖杯戦争は60年周期で執り行われるのであるが、第四次聖杯戦争から僅か10年。今まさに第五次聖杯戦争が行われようとしている。この異常事態に冬木の地下を通る膨大な龍脈を求めて人ならざるものが押し寄せてくる可能性がある為、こうして時計塔から直々に頼まれてやってきたのだ。」

（それにしても、あの時のロードの顔は凄かったな。んふっ、思い出しただけで笑いが…）

そんな彼の元に歩み寄る足音が一つ。

（歩く感じからして女性。私の強く常に優等生を演じているような気の強いタイプ。ルヴィアみたいな感じ。となると…）

「まさかアナタが来るなんてね。日本食でも恋しくなったのかしら？」

「やっぱり君か遠坂」

「あら？随分と他人行儀なのね。そういう硬っ苦しいのは苦手なんだけど」

黒髪のふわふわツイインテの彼女。魔術を嗜んでいる人間にとっては知らないであろう御三家の一つ『遠坂家』その現在の当主であるのがまさにこの女性。文武両道でお嬢

様。品があつて、男性なら一度はお付き合いたいと思う程の人物。しかし、その実態は機械音痴で沸点が低い癖に負けず嫌い。オマケに金銭感覚がズレているのに加えて浪費家である。

金使用に關しては彼女の魔術に深く係わつていたので仕方が無いような部分もある。

「今回は仕事で来ていてね。ついでに日本食でもと思つていたから丁度いい。で、腹が減つててな。食事でもしながら話しましょうか」

「そうね。せっかくだからエスコートして下さらないかしら」

「喜んで」

差し出された手を取り合うと、まるで観光地を巡るように歩き出す2人。傍から見ればデート中の美男美女のようにも見えなくもないが、残念なことにそうではないのだ

「それにしても日本語。上手くなつたわね」

「教えてくれる奴がいたからな」

「へー。そんな友達がいたの」

「仕事柄、数少ない友人だから。ありがたいよ」

「ふーん」

「不満か？」

「ちよつとね。もし話せなかつたら私が教えてあげようかと思つてただけ」

「さしずめ借りを作っておいておけばいいなって思ってたんだろ」

「その点に関しては間違いないわよ。ベルモンド家の財産をちよつとだけ頂けたらいいなってだけ」

金、金、金！魔術師として恥ずかしく無いのか！

その後、何となく歩いていたら雰囲気の良い具合に滲み出ている蕎麦屋があつたので入店。美味い鴨南蛮に舌鼓を打ちながら話を切り出した

「正直に言つて聖杯戦争が行われると聞いた。俺が来たのは60年周期で行われるのが10年という短い期間になつたのが理由だ。遠坂、悪いことは言わない。この聖杯戦争から手を引け」

「…… どうして私が参加していると言いきれるの」

「理由は3つあるが、全部聞かか？」

「3つもつて…… いいわ。全部聞かせてちょうだい」

「いいだろう。まずは最初にあつた時、『まさかアナタが来るなんてね』と言つたな。それは俺がここに来る理由が分かつていたからだ。とはいえ、この時点だとまだ怪しい程度でしかない。次にさっきの会話。聖杯戦争の話。まるで当事者のような落ち着きが見てわかる。既に召喚した英霊に何処かから監視しているんだろ。そして最後に、その

左手。店に入ってからもちにさせないようになつたのが決定打になつた」

「相変わらずといふかなんというか、遊び甲斐がないわね。いくら異形退治専門とは言つても、そんなんじや足元掬われるわよ」

「そうなつたら遠坂に手を伸ばしてもらうさ」

「それじゃ、一生感謝し続けも足りないくらい之恩を売つてあげるわ」

「怖いこというなよ」

「あら？ 一生養つてあげるつて言っているのよ」

「財源が財源だからな。文字通り一文無しになつたら頼むわ」

ユーリは立ち上がり二人分の会計を済ませるとレシートの裏に電話番号を書いて遠坂に渡した

「ちよつと急用が出来た。会計はしておいたからゆつくり食べてな」

「むー」

何が気に入らないのか。遠坂はしかめつ面でユーリの後ろ姿を見送つた。自他ともに認める才色兼備、文武両道、容姿端麗、質実剛健、まさに高嶺の花と言ふ言葉が相応しい彼女。もし彼女の通う高校の生徒がこの光景を目の当たりにすればユーリは男女問わず多くの人々に囲まれて棒で叩かれイカタコ状態になつてしまふだろう。

そんな彼女を置いていった人物は路地裏で電話に出ていた。

「はい。こちらベルモンドでございます」

『やつと出たか。今どこにいる』

電話の相手はぶつきらぼうな喋り方をしている。

「日本の冬木つてところだけど」

『日本だと……まさか仕事か？』

「時計塔からの仕事」

『そうか。あんまり無理はするなよ。お前が死ぬと悲しむ人がいるからな』

「わかつてるさ。心配してくれてありがとな」

「べ、別にお前の心配じゃなくて！同行者の好でだな！」

「それでも嬉しいよ。今度、一緒に仕事に行ければいいな。リーズ」

『そ、そうだなユーリ』

「んで、なんか要件が会ったみたいだが。まさか用もなく掛けてきたんじゃないだろうな」

『声が聴きたかった。つていうのは駄目か？』

「おまつ、なんてこと言いやがる!!」

『半分は本心だつてのは分かってくれるよな』

「わかった。そういうことならこの仕事が終わったら食事でもしよう」
『期待しているかなら』

「ああ。それじゃシオンによろしくな」

『待て！どうしてそこでシオンの名m（ブツツ）』

ツーツーツー

（しばらくリーズには会わないようにしよつと）

ヴァンパイアハンター

ユーリ・ベルモンド

夜を狩る一族ベルモンド家の末裔

聖鞭 *vanpaaia killer* を片手に異形を狩る者

吸血鬼…… 死徒狩りのエキスパート

その手で狩り尽くすのは一体……

Fate/vanpaia killer
—Bloody full Moon—前夜

時は2004年

日本にて行われる魔術師達の壮絶な争い『聖杯戦争』

この物語は異形狩りを生業とする男のハートフルコメディバトルノベルである

「ところでバゼット。どうして俺の連絡先を知っている。前にあつた時は教えてなかった筈だ」

「知り合いに聞いただけよ。一時的にとはいえ互いに背中を預けたのですから何も知らないというのはいかがかと思うわ」

「なるほど一理ある」

朝食のモーニングを同じ席で食べる男女

男性は夜を狩る一族。ヴァンパイアハンターのユーリ・ベルモンド。

女性の方はスーツ姿にワインレッドの様なショートヘア。いかにも仕事のできる雰囲気醸し出しているバゼット・フラガ・マクレミッツ。脳筋でポンコツな一面が愛

らしい人である。

「そつちも聖杯戦争絡みで来ているのだろうか……あまり一般の人に迷惑はかけるなよ」

「問題ありません。その点に関しては重々承知しておりますので」

まだまだ寒い日本の2月。オープン席で飲むコーヒーは冷たい外気に当てられて湯気とともに冷めていく。熱しては冷めていく様に世の中の単純さがコーヒーには詰まっているようにも思えてくる。

「バゼット……」

「なにしら?」

「聖杯って、本当にあるんでしょうかね」

「どうしたのよ急に」

疑問もそのはず。既に過去四回の聖杯戦争において御三家と呼ばれる魔術師の家系『遠坂』『真桐』『アインツベルン』が根源に至ったという資料はない。だがこうして聖杯戦争が行われている事実がある以上、何しらの問題があると疑うのは必然なこと

「いや。ただ本当に聖杯なんてものがあるなら、そいつに水道水か安物のワインでも注いで飲んでろうってだけだよ」

「魔術師全員を敵に回すようなこと言わないでくれるかしら」

「……………」

「……………」

「なあバゼット。俺は……………」

バゼットは一言『分かってるわ』と言葉を遮った

「でもね。私が選ばれたのには何かわけがあると思うの。だから引き下がることは出来ないの」

「……………」

「でも、ありがとう。こうして面と向かって心配してくれる人って君くらいだから」

「バゼットさんが雲の上の存在みたいに思われてるから、話しかけにくいんですよ。きつと」

男装の麗人と言われる彼女が「フッフ」と笑う。

「そういえば、初めて会った時もカフェのオープン席だったわね。しかも相席。その時は…………。君から声を掛けてくれたのを思い出したわ」

「忘れちゃいましたよ。何時のことですか」

「『不老』の君にとっては些細な瞬間かも知れないけど、私にとっては掛け替えのないものよ」

「…………。思い出した。丁度3年前くらいでしたね。あの時もこんな寒い時期でしたっ

け」

「ええ……」

それ以上は何も言わない。2人はただコーヒーを飲むだけ。全くもって有意義な時間とは言えないが当事者にとっては大切なものなのかも知れない

「それじゃ、俺はこれで」

「ええ。もしかしたら近いうちに会うかもね」

「お互い生きていればですが」

「そうね」

駅近くのビジネスホテル

そこに宿を取ることと優雅な夜を過ごしている

(あー。バゼットを誘って夜景が綺麗なところでダイナーと思っただけど……)

ユーリの感じ取った気配。人払いのルーンと結界。一瞬で構築されたところから相

当腕の立つ魔術師だという事だけしか分からない

(念には念を入れるか)

トランクから取り出す1冊の魔導書と聖鞭 vanpaia killer。それからいくつかの道具。

廊下に誰もいないのを確認し非常階段から屋上に上がるとロープで顔を隠すくらいに深く被った女性が待っていた。

「あら？子供は寝る時間よ。それとも、私とイイコトしたいのかしら？」

「参ったなー。美人の誘いには弱くてね。いまからここで一発つてのもそれはそれで興奮しちゃうな。」

「あいにく獣の交尾には興味がありませんの。」

彼女が聞き取り不可レベルの速度で何か呟く。すると周囲に複数の魔法陣が展開され、巨大なバターナイフを持つ頭部のない骸骨が召喚される。

「ヒューツ。ミステリアスな美人だと思ったらマジシャンだったとはな。益々好きになりそうだ。」

「随分と余裕ね。死ぬかもしれないとか考えないのかしら？」

「後悔は死んでからでも出来るからな。出来ることなら、今を楽しみたいんだ。」

「そう。なら死んでちょうだい。」

一斉に襲いかかる竜牙兵。ユーリは懐から鞭を取り出し応戦する。するとどうだろう。振るわれると同時に鞭はその姿を変えモーニングスターの様にチェーンの先端にトゲのついた鉄球モノへと変わった。

聖鞭 *Vanpaia-killer* によつて正面の竜牙兵は胸骨を砕かれ無惨。飛びかかつてきた竜牙兵は引き戻された鉄球により骨盤と背骨を砕かれ無惨。左右から切り掛る竜牙兵は8の字を横にした様な軌道で振るわれる鞭と鉄球に文字通り全身の骨を砕かれ無惨。

そのまま真つ直ぐ向かつてくる鉄球を彼女は魔術の結界で防御。が破壊される。しかしそれは彼女の狙い通りであつた。結界が破壊された勢いを利用して道路を挟んで反対の屋上へと離脱した。

「ほんの挨拶程度のもりだつたけれど楽しかったわよ坊や。私を誘いたかつたら次はワイルドさを出して欲しいわね。」

そう言つて霊体化し姿を消した。

「恐ろしい相手だつた」

彼は内心震えていた。

ほんの僅か。時間にして1分にも満たない程度であつたが目の前にいたローブの女性の力の片鱗を感じ取つていた。

（あれほどの詠唱に触媒を使わずの召喚。そして霊体化したあたりを見ると神代の魔女の英霊……）

人類史において魔女と呼ばれる存在は多いが、誰を師に仰いだか、どここの系統の詠唱か、どの国の言語か、そういったものから判断出来る要素がある。

今回のケースは明らかに聞き取れない逆再生3倍速のような詠唱。未熟ながら魔術の知識がある故に、その危険性というのを把握している。

（次会う時はそれ相応の準備が必要だな……）

彼は一人になった屋上から静かに部屋に戻った。

F a t e / v a n p a i a k i l l e r
— B l o
o d y f u l l M o o n — 宵月

時は2004年

日本にて行われる魔術師達の壮絶な争い『聖杯戦争』

この物語は異形狩りを生業とする男のハートフルラブコメディバトルノベルである。

「私の魔眼が通用しないだなんて、不思議なこともあるのですね。」

「なに。君みたいな美人に見つめられたら魔眼じゃなくても動けなくなってしまうさ。」

高身長でグラマラス体型の女性はヴァンパイアハンターことユーリを壁ドンで今にも唇が重なり合おうとしている距離まで近づいている。

石化の魔眼を所持している彼女は此度の聖杯戦争にてライダーのクラスで限界した存在。真名をメデューサ。その瞳は文字通り目を合わせたもの見つめられたものを行動不能にするもののだがユーリ・ベルモンドには効果がなかった。

それでも互いの引力に引かれるようにゆっくり、ゆっくりと顔が近づき2人は……

「!!?」

ドゴオン！

とても淫靡な雰囲気醸し出して二人は突如として放たれた殺気を感じメデューサは上体を捻って、ユーリはしゃがむ事でまっすぐ飛んできた物理的な殺気を回避した。爆音とともに飛び散るコンクリート片と剥き出しになる支柱。

「こんな時間から見せつけてくれますね。ユーリ。」

「バ、バゼットさんこそ。どうしてここに」

「こんな真昼間から盛っている男女は大人の女性として指導してあげないとね。ね？」

そう言つてコンクリートの壁をぶち抜いた拳を『ギョツ』と笑顔で握りしめた。

そんな笑顔のバゼットの前にライダーが立ちはだかる。一方は男装をしているが見事なプロポーションのできる女性。もう一方は長身で縦セタ巨乳メガネの超絶美人。

傍から見ればどうしてこんなSSS級の美女が一人の男性を取り入っているのかという構図に見えなくもないそんな睨み合いを崩したのは一人の少女だった。

「ライダー！ 白昼堂々とハレンチですよ！」

「さ、桜！」

そんな3人の間を割いたのはライダーのマスターであり、何だかんだ複雑な経緯があり、現在はユーリと生活を共にしている同居人の間桐桜。

アインツベルン、遠坂、間桐、御三家と呼ばれる魔術師の家計。元は遠坂の次女だつ

たのだが、これもまた複雑な経緯の果てに間桐の人間とし育てられたのだ。

「桜。目が覚めたのですね。」

此度の聖杯戦争においてライダーを召喚したのは間桐桜でありライダーも彼女がマスターである事を喜んでいる。

「すみませんユーリさん。ライダーがまた……。」

「いえいえ。ライダーは別になにも壊してませんので謝らないで下さい。」

ヘコヘコと平謝りする彼女を止めると、ふと二人の視線が重なった。

ふと瞳が蕩ける桜。頬が紅くなり次第に2人の距離が近づいていく。このままではイタズラなKissまでしかねない所で「コホンッ」とライダーの咳払いにより正気に戻った。

「それで桜。何やら私のことを探していたみたいですが、どうかいたしましたか？」

「そ、そうでした！あとユーリさんにもお伝えしたいことがあったので」

（チツ、バゼットさんがいるなんて思いませんでした。楽しい3P計画が台無しです）
「立ち話もなので、あちらでお話でも」

状況不利と感じたのかバゼットは無難に喫茶店に誘うことにした。

☆

Fate/vanpaia killer | Bloody full Moon
〜下弦〜

アンリマユにグランドクロスをしてから既に数ヶ月が経過したある日、ユーリ・ベルモンドの家（日本拠点）に1人の女性がやってきた。

彼女はまるで聖職者、シスターの様なローブにももの優しそうな表情ではあるが、そのメガネの下には邪悪な瞳が獲物を待ち望んで「なんですかこの不穏で不快な前フリは！」待ち望んでいた。

「出てきなさいユーリ！使徒退治ですよ！早く出てきなさい！」

「やだー！時計塔行きたくない！」

「いつまでも子供じみたこと言わないでください！ヴァンパイアハンターの名が泣きま

すよ!」

「…………… シエル。嫌い。」

シヨックを受けた。ただただシヨックだった。一緒に死徒狩りをした。共に窮地から脱した。仕方がない状況だったとはいえ体を重ねた。それ以来時々盛った獣のように交わることもあった。そんなビジネスライクな関係よりちよつとだけ親交のある仲であるのに「嫌い」と言われたことに彼女は『ヘナヘナヘナ』と音を立て崩れ落ちた。

「……………」

「…………… シエル。」

ユーリが玄関の扉を開けて顔を出した。

「言い過ぎた。ごめん。シエルのこと嫌いじゃない。むしろ好きだよ。」

「ほんと?」

虚ろな目をしたシエルが顔だけ上げて今にも泣き出しそうな表情を見せている。

「ほんと」

「~~~~~つつつつ!!!!好き!スキスキスキ!ユーリ大好き愛してる!」

このやり取りも既に五回目である。

しばらくしたら恥ずかしさに悶えているだろう (確定事項)

危うく、じゆるじやるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる、と強烈に下品な口付けを交わしそうになるも彼女を落ち着かせることに成功した。

なおこれは成功と性交をかけた高度なギャグとかそういうのでは無い。

「さ、先程は取り乱しましたが本題に移りましょう。使徒退治と言いましたが正しくは死徒化の防止です。魔術での人為的死徒化を研究しているという信じ難い噂を耳にしました。本来なら一人でどうにでもなるのですが万が一と言うこともあるので私の知る中でも最強のヴァンパイアハンターである貴方をお誘いしたのです。」

（キリツ）とした態度で説明をしているが先程の失態で全て台無しである。あれがなければ優しそうな知的な女性になるのだが、とても残念で仕方がない。

むしろ、そうした関係で知り合った女性たちはそういう変わったところがあるのでユーリとしては好感度高めの設定6となっている。

く朧月く

「あらユーリ。こんな所でお会いするなん。少しお話でも致しませんこと」

偶然もなにも時計塔で同じ廊下を何往復もして偶然を装うは我らがメインヒロイン（予定）のルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。遠坂凜とは何かにつけて争い合うところも少なくない片手で数えられるほどの友人といっても差し支えない人物。

此度の当事者であるユーリは彼女との間に限りなく異性愛に近い友情を育んでいる。

1度ではあったが彼女の聞へと誘われた時、夜が明けてから再び月と太陽が入れ替わる程に交わった。

無様な姿を晒したこともある彼女であったが、こうして優雅に可憐に高貴に振舞っている。

ワンナイトラブなどという生易しいものならよかったのだが一方的な正依存性になりかねない自体にまで発展しかけたのは誰の目からも明らかであろう。

なおこの発展は「発展」と「ハッテン」を掛けた高度なギャグで（ry

見るものを魅了する麗しの彼女は何かを感じとったのか、はたまた女性特有の直感な

のか、スンスンと目を瞑りながら危険物を嗅ぎ分ける特殊犬のようにユーリの匂いを確かめた。

ほんの一瞬、純度の高い上物の薬物を直接脳みそに打ち込まれたかのような夢心地にトリップしたが、その甘くとろけるような危険で甘美で蠱惑的なものの中にある僅かな異物によって辛うじてだが大勢の見ている中、無様に体中の穴という穴から謎の体液をぶちまけながら失神するという事態を免れた。

だがそれが、逆にルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトの逆鱗に触れた！

「つかぬ事をお聞きしますが、先週までどなたかと、いえ、女性の方とご一緒でしたね？」

富、名声、力

かつてこの世の贅を極めたという男

英雄王ギルガメッシュ

彼の死の際にはなつた一言は全世界の男たちを果てなき冒険へと駆り立てた

「雑種！女神だけは辞めておけ！」

世はまさに！
大修羅場時代！